

【フロンティアスクール用中間報告書様式】

(千葉県)

I 学校の概要 (平成15年4月現在)

千葉市立緑町小学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	2	3	3	2	3	0	16	23
児童数	98	77	85	92	76	84	0	512	

II 実践研究の概要

1. 主題 (テーマ)

発意・発見・発揮する子どもを育む
 — もの・人・自分とのかかわり合いを大切に —
 (理科・生活科を中心に研究に取り組む)

2. 内容と方法

(1)実施学年・教科

1・2学年 生活科

3・4・5・6学年 理科

(生活科・理科ともに、本年度より本校の校内研究として取り組む教科であること、また、本校には千葉市の理科センターが置かれており、地域や子どもたちの自然や科学に対する関心が高い。)

(2)年次計画

平成14年度

○テーマ及び仮説

生活科研究主題
 もの・ひと・自分とすすんでかかわり合いながら、よく見て、気づき、活かすことができる子どもを育てる生活科学習はどうしたらよいか

生活科仮説

①地域の特性を生かした単元構成を工夫すれば、興味・関心が高まり子どもは生き生きと活動することができるだろう。

②一人一人の気づきを的確に把握し個に応じた支援をすれば、子どもは気づきを深め、生き生きと活動することができるだろう。

③一人一人の良さを認め、かかわり合い学び合う場を工夫すれば、子どもは互いの良さに気づき、生き生きと活動することができるだろう。

理科研究主題
 もの・人・自分とのかかわり合いながら、見通しをもって主体的に問題解決することを通して、科学的見方や考え方を深める理科学習はどうしたらよいか

理科部仮説

- ①自然の事物・現象への子供たちの興味・関心を高め、主体的な学びができるような学習方法を工夫すれば、科学的な見方や考え方を喚起することができるだろう。
- ②個々の子どもたちが描いた思いや考えを自由に表現したり、互いに学び合った上、追究したりできる場を工夫すれば、自然現象についてのきまりを見出し、科学的な見方や考え方を養うことができるだろう。
- ③子どもたちが発見したきまりを個々の思いや考えで自由に表現したり、応用したりできるように支援を工夫すれば、自然現象についてのきまりや気づきを確かなものとし、科学的な見方や考え方を深めることができるだろう。

○研究内容・方法

「発意・発見・発揮する子ども—主体的に学ぶ子ども—」の育みをテーマにし、本校の子どもたちの実態から、研究テーマに迫るキーワードとして、「もの・人・自分自身とのかかわり」を掲げ、生活科・理科それぞれの教科での具体的な子どもたちの姿を考えながら、主題・仮説に迫る学習指導のありかた、指導体制・指導方法の工夫改善や、単元構成や評価計画を含めた指導計画の見直し、教材開発等を検討する。検証授業を中心に、講師を招いての理論研修や、学年や部会ごとの指導計画の見直しや検討を行った。

○テーマ及び仮説

平成14年度と同じ

○研究内容・方法

平成14年度の研究の成果と課題をもとに研究計画を修正し、主題・仮説に迫るためのより具体的な手立てを検討し、検証していきたい。特に、次の3点については、子どもたちの実態を細かく調査しながら、データを集め、指導と子どもたちの変容との関連をとらえ、研究計画に生かしていきたい。

- ・主体的な問題解決に必要な資質・能力を育むための具体的な手立てや方法について追究する。
- ・クラスや学年を対象にした、個に応じた支援のための具体的な手立てや、効果的なティームティーチングのあり方を追究し、実践を重ねながら検証していく。
- ・緑町小の特色を生かした単元構成と支援に生かす評価計画を含めた、指導計画の作成、及び修正。

平成
15
年
度

○テーマ及び仮説

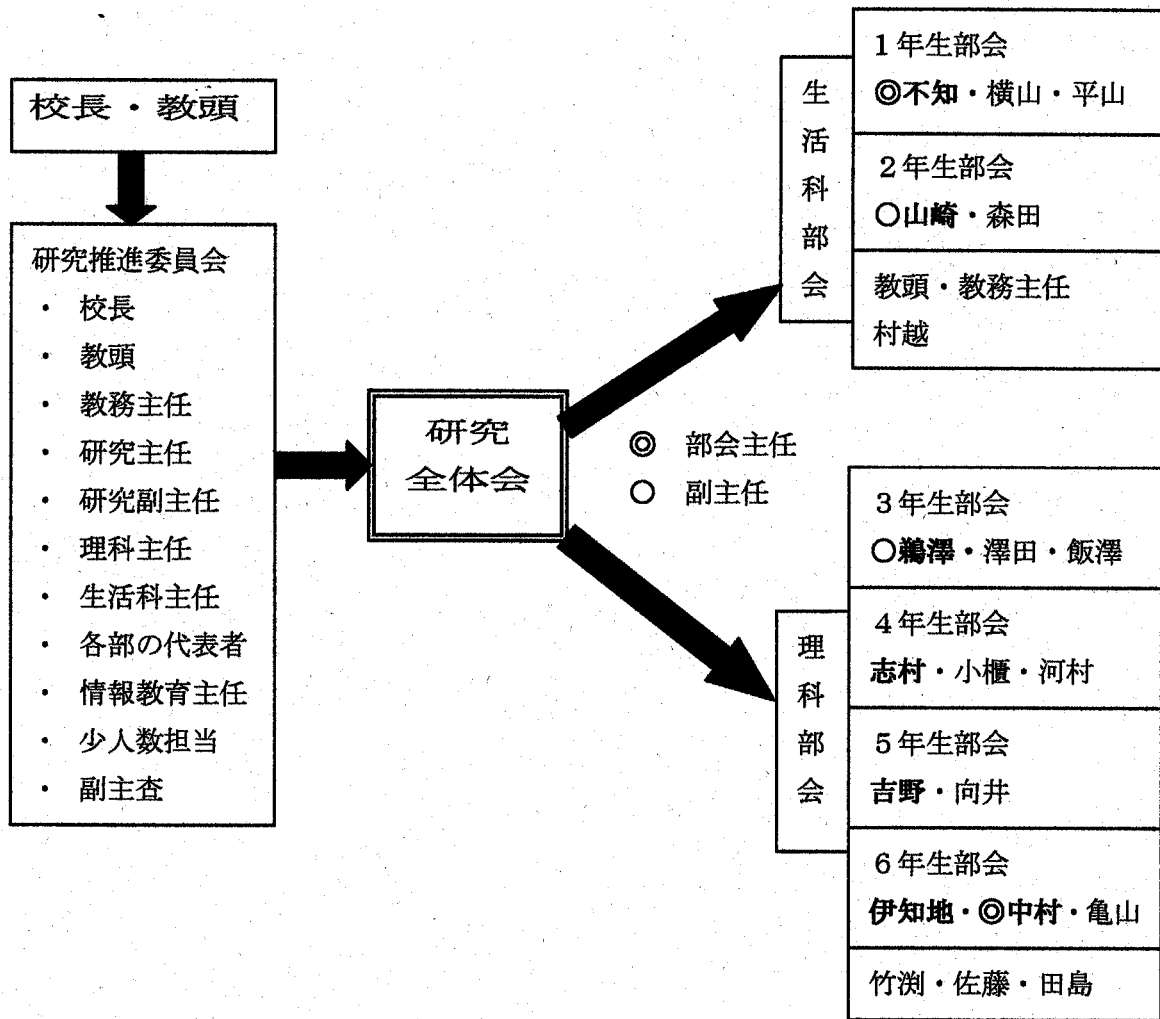
平成14年度・15年度と同じ

○研究内容・方法

3年間の研究の集大成として、今までの研究の成果と課題をまとめる。

平成
16
年
度

(3)研究体制



Ⅲ 平成15年度の成果及び課題（成果○，課題△）

主体的な問題解決に必要な資質・能力を育むための具体的な手立てや方法について

【生活科】

- 子ども一人一人の思いや願いを的確に把握し、それぞれに応じた楽しい活動の場を工夫したことにより、子どもたちの興味・関心が高まり意欲的な活動が見られるようになった。
- 子どもの興味・関心を一層高め、感動を与えるような事象の提示や実物、実技など子どもの意欲を喚起し好奇心を揺さぶるような手立てを工夫したことにより、子どもたちが意欲をもって主体的に活動することができた。
- 子ども一人一人の気づきの把握に努め個に応じた指導や称揚を心掛けたため、子どもは気づきを深めていくことができた。
- 互いの気づきを交換する場を設定したことにより、共感や新たな気づきが生まれ互いのよさが実感できた。

○ 地域のボランティアの人たちやゲストティーチャーとの交流により、子どもたちの視点が広がったり、適切な支援を得たりすることができ、学習に深まりや広がりが見られた。

△ 生活科の学習は、様々な教科や総合の学習につながっていく基礎となる教科である。生活科での学習を他教科に活かすことを踏まえて、1, 2年を通した24ヶ月の学習計画を緑町小の特性を考慮しながら更に工夫し考えていく必要があると考える。

【理科】

○ 学習のねらいに沿った適切な実態調査と、主体的にものとかかわる場の設定の工夫により、子どもたちが見通しをもって学習に取り組み、主体的に問題解決することができた。またその際、T.Tによるきめ細かな支援が効果的であった。

○ 人との関わりやものとの関わりが十分持てるような、追究するための時間の確保と、個々の子どもが抱いたイメージを図で表現させるなどの学習方法の工夫により、子どもの考えを把握し、適切な支援を行うことができた。このことにより、子どもたちは見通しをもった追究活動ができ、自然事象についてのきまりを見出し、科学的な見方や考え方を養うことができた。

○ 自然事象についてのきまりや気づきを確かなものとし、科学的な見方や考え方を深めるために、発見したきまりをおもちゃやゲーム作りに生かすことにした。それにより、追究の深まりや広がり生まれ、実感を伴った理解を深めることができた。そして、互いの作品を紹介しながら楽しむことによって子ども同士の話合いが活発化し、自分が学習していないもう一方の学習に対する一人一人の意識が高まった。ものに適応化させるまでには、T.Tによるきめ細かな支援と、自分の活動を振り返る時間の確保が重要な要素である。

△ 児童一人一人が、より主体的に見通しをもって課題追究ができるように児童の実態に即した単元構成や指導計画の工夫をさらに深めていきたい。

△ ものとの対話に多く時間をかけながら、1単位時間の中で友達と実験結果を情報交換できるような学習形態を考えたい。

△ 発見したきまりをものづくりにさらに生かせるようになる支援を考えたい。

個に応じた支援のための具体的な手立てや、効果的なチームティーチングのあり方

【生活科】

○ 課題別に子どもたちが選んだグループ別の活動を行ったが、生活科の時間だけでなく給食の時間など単元のテーマである「食」に関連のある活動をグループ単位で行うように心がけ、担当教師(2クラス3T)と子どもたちのコミュニケーションを密にしていた結果、一人一人への理解が深まり、個に応じた支援につながった。

○ 学習の目的に合わせて、多数のゲストティーチャーを招き、教師が子どもたちとGTと円滑に交流できるように工夫して、一人一人の興味関心や課題に応えられる体制を整え

たため、子どもたちの思いや願いが達成され、成就感を得ることができた。

△ T.Tでの支援体制では、それぞれの役割分担を明確にして指導に当たることが大切である。学習の目的や子どもたちの思いを達成するためにより効果的な活用について、今後さらに検討していく必要がある。

【理科】

○ 子どもたちの実態や学習の目的に応じて、1次：1学級2T⇒2次：追究課題別グループ学習（学年4T）⇒3次：1学級2Tというふうに柔軟な学習形態、指導体制を組んで支援に当たった結果、課題別グループの指導では、個別指導が他の子どもたちと共有化することもあり、効率よく支援することができた。また、1クラス2Tでは、課題把握や検証実験の際、よりきめ細かい個への支援ができた。

○ 「発揮」の場面では、見つけたきまりをものづくりを通して一般化していく学習過程では、T.Tによる、一人一人に応じた支援が必要であった。

○ 子どもたちの多く（約80%）がT.Tで学習を進めたことが良かったと答えており、具体的な理由として、必要な時に適切な助言が得られたことをあげている子どもが多い。一人一実験や、自分たちの考えた方法で実験する際に、きめ細かに支援できたことで、子どもたちが実験そのものに集中し十分な時間を費やすことができ、その結果科学的なものの見方を深めることにつながっていった。

△ 単元の目標や子どもたちの実態に応じて効果的なT.Tの指導体制を組むためには、ぜひ1学年1Tの加配を希望したい。

緑町小の特色を生かした単元構成と支援に生かす評価計画を含めた、指導計画の作成

○ 生活科、理科ともに、子どもたちの実態を踏まえ、指導に生かすための評価規準を作成した。昨年度作成したものについて、本年度は実践を重ねながら検証し修正を加えた。評価することで子どもたちの具体的な姿や課題が明確になり、支援に生かすことができた。

△ 今後はさらに実践しながら修正を重ね、より本校の特色を生かし子どもたちの実態に沿ったものにしていきたい。

IV 学力把握のための学校としての取組

- ・ 授業中での子どもの見取りと、ノート・シート・発言内容等の記録・分析。
学習活動中での子どもたちの変容を目標に沿って見取り、指導計画や支援方法に生かす。
- ・ 年1回の学力テスト（算数・理科）の実施。（15年2月、16年2月）
観点別に子どもの変容を調査する。

V フロンティアスクールとしての成果の普及について

- ・ 研究発表会の実施。
日時 平成15年11月21日(金) 午後1:00~4:50
テーマ 「発意・発見・発揮する子どもを育む」
- ・ 研究成果普及のためのHPの作成(現在「平成15年度の研究のまとめ」を作成中)



◇ 次の項目ごとに該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 14年度からの継続校
- 【学校規模】 13~18学級
- 【指導体制】 少人数指導, T.Tによる指導
- 【研究教科】 生活, 理科
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有